



2010/4/1 No.53

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

愛をもって仕える



理事長

木下 宣世

皆様方のお祈りとご支援により過ぐる一年も無事に終り、新しい年度の歩みが始まりました。これまでの皆様の数々の協力と応援に對し心から御礼申し上げます。

昨年開設された「望みの門方舟乳児園」もお陰様で今日まで職員一同の努力によって託された使命を遂行してこることができました。方舟乳児園の開設により望みの門はまさに赤ちゃんから高齢者まで全年齢層の方々を受け入れる総合的な社会福祉施設となりました。

施設が大きくなればなるほど私たちは利用者の方々一人ひとりの生活が大切に守られるように、職員一同が一致協力して働かなければならないと心をひきしめています。その上にさらに皆様方の暖いご理解とご支援とを賜り、利用者、職員、支援者一体となってより良い福祉の業を進めていくことができたらと願っております。これからどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、気をひきしめるということは初心に帰るということであり、また基本に戻るといふことでもあります。

望みの門のモットーの一つは「愛をもって

仕える」ということです。ですから私たちは繰り返しこのモットーを確認し、いつもここから出発しなければならないと思っています。この「愛をもって仕える」あり方は私たちの救い主イエス・キリストが弟子たちに教え、同時にご自身が自らの生き方として私たちに示してくださったものです。それはご自分の十字架の死が近づいてきたことを悟り、その事を弟子たちに告げられた時でした。

その言葉を聞いてもおこの世的な名誉や栄達を求めようとしていた弟子たちに「わたしは仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(マルコ一〇の四五より)と語られたのです。

イエス・キリストは神の独り子でありながら私たちの救いのためにその命を十字架の上で献げてくださったのです。このキリストの犠牲の死によって、私たちは救いを与えられ、生かされているのです。

神が人間のために犠牲を献げ、それによって人間を滅びから救ってくださった。これは私たちの常識の逆転です。私たちの常識では、私たち人間が神さまから救って頂くためには自分たちの方から神さまに犠牲を献げるのが当然です。ところがキリストは私たち人間のために犠牲となってくくださったのです。

ここに「愛をもって仕える」あり方の根源があります。このキリストの愛によって生かされている者として私たちも「愛をもって仕える」業に励みたいと思います。

新年度を迎えて のぞみ会の立ち位置



常務理事

井本 義孝

聖書に新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるものはいない。そんなことをすれば、皮袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになる。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるものだ。(マタイによる福音書九章十七節)と有名な言葉があります。つまり何かが改まったり、新しく何かが始まる時などによく引用される聖句です。この十年、社会は激変したと私は考えています。希望と期待にあふれて新世紀を迎えた世界は、地域紛争と経済社会の変動が人々に不安をもたらし、かつてない程、安心、安全が求められています。私達のまわりを見ても、少子、高齢社会の到来で、お年寄りが増え、私もその一人ですが、特に介護の必要な方が多いのです。千葉県一万余人、全国で約四十五万人の人々が特別養護老人ホームの待機者といわれています。富津市では四特別養護老人あわせて入所定員二百二十二名、短期入所定員五十八名、合計二百八十名これに対し待機者は五百七十二名市内のみが三百四十二名、市外二百三十名(本年一月三十一日現在)となっ

ています。紫苑荘にも百二十名の方の申し込みがあります。入所定員の約二倍の方が入所を希望されています。皆さん介護保険の第一号被保険者です。介護保険の掛け金を年金から天引きされていても、サービスは自由に受けられず、制約はかなり厳しいものがあります。入所施設がたりません。足らん足らん脳足りん(能足りん)と昔よく言われました。特養やその他諸々の入所施設を作れば、医療費の負担が増えるので、市町村は歓迎しないと言われています。本当でしょうか。

もしそうだとすれば、高齢社会をむかえて地域福祉の充実どころか、その実態はお寒い限りとも言えるかもしれません。

今月二十三日西千葉教会において新年度予算ならびに新年度事業計画が役員会で承認されました。そのなかに有料老人ホーム(外部介護サービス型)定員十一名二階建て準耐火構造が承認されました。場所は職員宿舎前の農場です。年内に竣工予定です。

かつては婦人保護施設の学園から養護老人ホームの楽生園、そこから特養の紫苑荘へと比較的移動が容易にできました。現在は大変厳しい状態です。

法人のぞみ会は常に時代のニーズと取り組み、使命である先駆性と奉仕の精神で地域社会のために福祉事業を展開してまいりました歴史があります。のぞみ会の立ち位置は開拓的にニーズに応じる処にあるのではないでしょう。

新年度は有料老人ホームのみならず超高齢

社会における課題解決と、次世代を担う児童の健全育成のために新たなビジョンを必要としています。

春の人事異動

昇任

地域福祉部長 三橋信康

(兼務望みの門新生舎施設長)

施設福祉部長 坂本文夫

(兼務財務顧問)

施設長 西山信男

(中核地域生活支援センター)

課長(心得) 白鳥尋子

(在宅支援課)

副施設長 小嶋友子

(望みの門楽生園)

主 任 橋本順子

(望みの門かずさの里)

新藤紀子

(望みの門かずさの里)

副主任 三弊知子

(望みの門新生舎)

町田佳市

(望みの門楽生園)

松田一史

(望みの門楽生園)

保坂恵子

(健康管理室)

副主任 鈴木美雄

(在宅サービス課)

渡邊絹恵

(望みの門かずさの里)

足立利江

(健康管理室)

異動

田尻 隆 施設長

(望みの門方舟乳児園)

↓望みの門学園

佐野 毅 施設長

(望みの門学園↓望みの門方舟乳児園)

井本義樹 主任児童指導員

(望みの門かずさの里)

望みの門方舟乳児園

榎本一代 保育士

(望みの門方舟乳児園)

↓望みの門かずさの里

新規採用

矢城彩乃

(事務局総務課事務員
君津商業高校卒)

渡邊友香

(望みの門学園心理相談員)

仲村優哉

(望みの門かずさの里児童

淑徳大学卒)

指導員 城西国際大学卒)

星野沙也加

(給食サービス課栄養士

海野雅代

(望みの門方舟乳児園児童

淑徳短期大学卒)

指導員 埼玉学園大学卒)

望みの門 かつさの里

望みの門コミュニティホール竣工
記念福祉講演会

施設長 戸波 宏幸

三月二十五日、望みの門かずさの里において「望みの門コミュニティホール開設式並びに記念講演会・シンポジウム」が開催されました。かずさの里の体育館は、本年一月末に改修され、武道を中心とするスポーツコミュニティ「望みの門コミュニティホール」として開設されました。これを記念し福祉講演等の開催となりました。当日は季節外れの冷雨でしたが、百二十余名の参加者を数え充実した研修会となりました。

講演は中央児童相談所長水鳥川洋子氏を迎え「健全な社会と児童育成のあり方」をテーマにお話いただきました。悩ましい児童虐待の増加、また一時保護所での子どもたちの様子を通し、健全な社会とは・子どもの健全育成とは：熱く語っていただきました。参加者の内、児童福祉に関わる方は少数で、大半は初めて耳にする子どもたちの厳しい現状に、驚きと当事者意識を強くしたようです。この後、コーディネートに明治学院大学教授の北川清一先生、シンポジストに児童養護

施設野の花の家花崎みさを施設長、子山ホーム森田雄司施設長、水鳥川所長を交え、「児童虐待の現状と課題」をテーマにシンポジウムを行いました。

お二人の施設長からは、預かって

いる子どもたちの思い・暮らしぶりが語られ、改めて養育の大変さ、難しさを感じたようです。また改めて、北川先生から現代社会での「子育て支援・子育て支援」の重要性を説いていただき、閉めさせていただきました。各先生方から更にお話を伺いたいところでしたが、限られた時間となり少々残念でもありました。

短い時間ではありましたが、学校関係者を含め、地域の多くの方々にお話しを聴いていただき、里の子どもたちへの理解をより一層深めていただけたかと思えます。同時に私どもの本業である「子育て支援」の充実に向け気持ちを新たにいたしました。

東京望みの門 マナの家

「よろしゅう、おあがり」

調理員 山下喜美子

私がこどもの頃、満足してご飯を食べ終わる「ごちそうさま」と言うとき、京都生まれの



母は、「よろしゅう、おあがり。」(よく、食べましたね)とにこにこしながら、言ってくれました。その母も、今年八十八歳です。

さて、東京望みの門で夕食作りのお手伝いをさせていただくようになってから五年余りにもなります。台所も初めのころより改装され、きれいに機能的になりました。寮生の年齢も若くなり、そのエネルギーには圧倒されそうな時もしばしばです。食事のメニューも年齢にあわせて若者向きに変わってきました。私のこどもにつくっていたメニューにもトラスして、食べたことのないメニューにもトライしています。台所でご飯のしたくをしていたある日、仕事が休みの寮生が後ろを通りかかり、「山ちゃん、(初めのうちは山下さんだった)今日のご飯何?」とたずねてくるので「牛丼よ。」と答えると、「それ、松屋風?吉野家風?」とさらに聞かれ、「?食べることないからわからない。」と答えると「ヒエーッ」とあきれられてしまいました。こんな調子ですが、食べ物を通して寮生が楽しそうに声をかけてくれます。そして、料理がうまくいこうだとは思っていませんが、楽しい幸せなひとときのお手伝いができればと思いながらつくらせていただいています。聖書に『何を食べ、何を飲むか...とおもわずらうな』とありますが、わざわざそう書かれているということは、人間のおもいの中の大きなウェイトをしめていることなのでしょう。そう言えば、先日の礼拝の説教でも「人はパンのみで生きるのではないとありますが、けしてパ

ンがどうでもいいわけではありません。それだけではない、ということですよ」と言われた事を思い出しました。食育のウエイトの大きさを思いつつ、寮生の方々の少しの幸せのお手伝いになるよう、何を食べようかと思わずらっております。(神様ごめんなさい)

毎日、「よろしゅう、おさがり」と言えるように。

婦人保護施設 望みの門学園

『まっちゃん』

生活指導員 大野 康子

暖かな陽差しの中に、色とりどりの花々が芽吹き今を盛りと輝いています。

この春に、学園から一人の利用者が巣立っていきます。今は喜びと期待に胸膨らませ、希望に満ち溢れている事でしょう。

今に至るまでには、様々な苦労がありました。単独での生活訓練や老人ホームでの介護業務は、これまで以上に努力を重ね、弛まぬ努力でこの日を迎えました。学園を退所する事は、永い人生においては通過点に過ぎませんし、僅かな一歩です。でも、大切にして欲しい一歩です。自分自身の努力は基より、受け入れて下さった職場の皆様の暖かい支えがあったからこそ、実現したものと感謝しています。

今、新たな夢と共に新しい人生を踏み出したばかりで、危なっかしく不安だらけです。真直ぐ前に突き進むだけでなく、困ったとき

には立ち止まり振り返る勇氣も必要です。すぐ後ろに皆がいる事を、忘れないで欲しい。人は皆一人で生きているのではないのだから。氣負わず、「頑張り過ぎない頑張り屋さん」でいてくれる事を望んでいます。

現在、望みの門学園には、二十三名の利用者が生活していますが、多くの人が何らかの問題を抱えています。しかし、それでも皆自立に向けて頑張っています。就職が決まり意気揚々とするが、仕事と思うように上手くいかず悩み苦しんだり、又、自分の不甲斐無さに落ち込み次の術を考える余裕のない人もいます。しかし、障がいには壁ではありません。利用者みなさんは、障がいがあるために何もせずに世間から身を潜め隠れているのではなく、素直に、そして有りのままの姿をさらけ出し、何事にもめげずに挑戦できる人達だと信じています。

近い将来、輝かしい夢と共に、一人また一人と多くの利用者が巣立っていくことでしょう。共に生きている事を喜び、分かち合える大切さをひしひしと感じています。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

「平成二十二年の取り組みについて」

副主任生活相談員 松田 一史

この度、平成二十二年四月一日付で、支援員から副主任生活相談員の辞令をいただきました。

支援員の時と同様に一生懸命精進したいと思っていますので、宜しくお願いします。

私なりに相談員の仕事内容は次のように考えております。

施設には看護師、栄養士、調理師、事務員、支援員とそれぞれの専門職員が働いています。

一人ひとりが、報告、連絡、調整、の相談の場をもたず利用者の皆様に関わると、提供するサービスに「ムリ、ムラ、ムダ」が生じるとおもわれます。

自分としては、全職員と密に報告、連絡、調整を取り合いサービスをコーディネートしていきたいと考えています。

また、事業全体の業務を理解し、大局的な視点で行動し、「知らない、聞いてない、わからない、担当ではない、できない」を無くして、知らなければ「知る」努力をし、聞いていなければ「教えてもらい」、わからなければ「学び」、担当でなければ「担当者依頼」し、できなければ「何か足りないか」を考え、「明日はできる」ための努力をしていきたいと思っています。

利用者の皆様に相談されたことに對しては、今の状態をよく理解した上で、必要なことかどうか判断し、生活の向上に役立てるように、支援していきたいです。

利用者と共に自己実現に努め、方



策と情熱と信念を持って邁進します。

生活面では、室内にこもりがちな利用者の皆様の生活範囲を広げ、生活に張り合いを出してもらうため、畑クラブを行うことになりました。

畑を耕すことから始まり、何を植えるかも利用者の皆様と話し合い、苗を植え、水まき、雑草取り、収穫等、皆さんと一緒に季節ごとの作業を行い、自然の移り変わりを体験できたら、いいなあと思います。

利用者の皆様に、笑顔が絶えない生き生きとした生活ができるような施設を目指します。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

「今思ふこと」

施設長 簾 昭博

高齢者の置かれている環境は、近年急速な変化を強いられました。介護保険制度導入以前では考えられないような状況が生まれてきています。従前では、施設における高齢者福祉に社会的関心が及ぶことはごく稀なことであり、極端に言えば施設利用している家族にとってはどちらかと言うと社会的にタブーな事柄として位置づけていた部分もあるのではないのでしょうか。ところが、急激な高度経済成長期の歪と言っているでしょう。核家族化による少子高齢化の加速、それに相反する福祉施策立ち遅れのため、ここに来て問題の重大性から急激なクローズアップがなされる状況に至っています。そして、介護保険制度導入以来、医療保険よりしく高齢者福祉

は社会保障の一つに位置づけられ、タブーから公然の権利となりました。

規制緩和等により全国的にも様々な種別の高齢者対象の施設が急増をみましたが、現在も施設入所待機者が全国で四十五万人いる状況で、今後ますます施設需要は高まる傾向が続きます。

このような状況の中、今の高齢者福祉環境に、どこか空虚さを感じるのは私だけでしょいか。脈々と歴史を重ね、培ってきた福祉のあるべき精神を、社会的状況に強いられれた急激な変化・制度が飲み込もうとしているようにも映ります。介護保険制度における規制緩和は、高齢者介護を福祉からビジネスへと変化させてしまったようにも思えます。私たち福祉に携わる者として日々新たにされて意識して当たらなければならないことは、次の言葉に凝縮されています。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この言葉は聖書の中によく出てくる戒めのひとつです。隣人とは私たちがどこにいても私たちの近くにいる人のことをさしています。本質的に自己中心的存在である私たちが助けを必要としている人々と関わる時、心の土台に大切に据えておかなければならない戒めです。

老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター
『笑って暮らす世の中はアッハッハの
アッハッハで楽しいな!』

在宅支援課長(心得) 白鳥 尋子

昨年度は、内装全面改修等ハード面に力を入れた一年、改修後デイサービスの壁面には

タイトルの言葉が貼られております。今年はソフト面の充実化。安全に楽しく笑顔で満足して帰宅して戴くにはどうすべきか、心身の安らぎと笑いのある余暇を提供するには…とスタッフ一人一人が試行錯誤の真最中です。また、地域の方や、教会の方々に協力いただき、サークル活動、慰問、御話し相手等、今まで以上に様々なボランティアの方にぜひ来て戴きたく、計画中。

その先駆けとして、一月より手話サークル(第一・第二火曜日)、詩吟サークル(第二・第四水曜日)が始まりました。どちらも興味の有無が問われますが、毎回「指先を動かす事、声を出す事が、心身にとっても良い。」という話をした上で開始すると、皆集中し、動くのが億劫な方が指先を一生懸命動かしたり、発声練習では職員が驚くほどの声がでたりと、個々の出来る範囲内で身体全てを使い楽しみながら参加されております。呼び掛け

により、利用日の変更をする利用者もおり、今はまだまだですが、今後発表する場を設け、励みや、生きがいの一つになると幸いです。また、このサークルは、御家族、地域の方、職員と



なたでも参加できます。他施設へ面会に来た際や、御近所の方を御誘いの上気軽に立ち寄りください。

このように今後も地域の皆さまのお力を借りしつつスタッフもアクティビティに関する知識・技術の向上を図り、『ワッハッハのアッハッハ』と笑いのある楽しい質の良いサービスを目指していきたいと思っています。

高齢者居宅介護 望みの門在宅サービスセンター

「在宅介護支援について」

管理者 門馬 靖子

日本での高齢化社会の進行は確実に進み、特に近年介護を巡っては様々な問題が浮き彫りになってきています。例えば施設が在宅かという介護生活の場の問題。施設に入りたくても入れない人、施設の絶対数不足や金銭的な問題など、その状況は様々ですが、現実には施設入所（主に特養）を希望しながらそれが叶わない待機者は増加しています。そういった方々は在宅での介護を考えた場合、生活の継続性、家族間の人間関係など、結局経済的、或いは社会的な問題と直面せざるを得ないのです。

在宅介護の困難さに関しては、悲惨なニュースが度々伝えられているように、行うには並々ならぬ労力を必要とします。そうであるにも関わらず、施設の需要に対して供給が追いついていない現状が、その事実を更に重大な問題へと押し上げています。つまり、介護を行うにあたって、さまざまな問題点を

考えると家族がとる選択肢が存在し得ないのです。選択肢が少ないほど本人、家族の希望・状況には必ずしも適さない道を選ばなくてはならないケースは増え、介護者、要介護者のお互いにとって無理のある生活を送ることになってしまっています。

こうした本人・家族に相對して、なんとかしたいと思ってしまう。まるで自分のことのように。しかし思うように解決できないジレンマを日々抱えてしまっています。その中で今ある社会資源を最大限活かし、利用者の目線に立って対話を行い、ベスト、それが無理なら、ベターでも、グッドでも、少しでも良い解決策を共に考えて導き出せるように努め、利用者の代弁者として、より一層の努力をしたいと思っています。

知的障害者授産施設 望みの門新生舎

「利用者から」

副主任作業指導員 中尾栄次郎

私は新生舎に勤務して三年目を迎えようとしています。これまで障害者福祉という仕事の経験が全くなく、ボランティア活動さえもした事がありませんでした。初めはどうやって利用者と接すれば良いのだろうか？としばらく悩んでいた時期がありました。

この二年間は毎日いろいろな角度で物事を見つめることができるよう、自分なりに努力し、日々の中で利用者への支援の仕方はどうであったか、自分自身はどう行動できたのかと振り返りを重ねてきました。その甲斐あつ

てか、少しずつではありますが物事に対して余裕を持って見られるようになった気がする。今日この頃です。

そんな折、利用者として接していく中で心を動かされるような出来事が続けてありました。ひとつは、昨年十月に行われた地域交流スポーツ大会の事です。大会の前日に私の首は毛虫が原因でひどくかぶれてしまい、そんな首を見て複数の利用者から「ひどくなっているけど大丈夫？」と声を掛けられたことです。もうひとつは、新生舎でインフルエンザが発生している時でした。実は私も体調を崩して十一月に入り仕事をお休みさせていただいたことがありました。数日が経ち、体調も戻り出勤した朝に「中尾さん大丈夫？」と、何人かの利用者に声を掛けられたのです。

この二つの出来事は日常よくある光景に見えると思いますが、私にとってはその何気ない一言がとても嬉しく心に残るものでした。今までの私は障害者支援というものに対しての知識がないことから、どのように接して良いのかが分からず、自分の思い込みで「相手との意思疎通ができず一方通行なものだ」と勝手に解釈し、自分から線を引いてしまっているところがあったように思います。現在思えば、障害者というものに対して私は「壁」を作ってしまったように思えます。

「ありがとう」や「大丈夫？」などといった言葉は思ってもなかなか発することのできないものですが、利用者の皆さんは何の迷いもなく自然体で「大丈夫？」と声を掛けてくれ

ます。私は利用者のまっすぐな思いに心を動かされ、障害者に対しての「壁」も無くなっただよりに思います。そして、自分から向き合おうとしなければ気持ちも伝わらないし、振り向いてももらえないという大切なことを利用者から学んだように思います。



利用者一人ひとりの障害をどのように支援して行くかが私たち職員の役割ではあります。それが以前に利用者一人ひとりと向き合える自分がなければ支援には結びつかないと改めて感じています。これからは利用者の心を動かせるような支援員を目指し、少しでも利用者の成長に役立てられたらと思います。

「一体型共同生活介護事業所 グレースホーム」 「日中活動」について

副主任世話人 樋口 千恵

グレースホームでは、現在十九名の方々が、四ヶ所の共同生活住居で地域生活を送っています。今回は、グレースホームで生活されている方々の日中活動についてご紹介します。

日中活動としては、一般就労している方が三名、通所授産施設を利用している方は四名、

地域活動支援センターⅡ型を利用している方が十二名となっています。

就労している方の二名は、当法人の老人施設の紫苑荘、楽生園で働いています。紫苑荘で働いている方は、洗濯物をたたんで仕分けをする仕事を主に行っています。また楽生園で働いている方は、トイレなどの掃除や、洗濯物を干すなどの仕事を行っています。苦手なこともあるようですが、それぞれの施設の職員さんに、教えていただきながら頑張っています。そして、今度のお休みには何をしようかなと楽しみにしています。

また、一名の方は、平成七年から十五年にわたって、富津市内の食堂で働いています。彼女は高血圧の持病をもっており、毎日、血圧を測定してからの出勤となります。血圧が高い場合は、職場を休むことになるので、仕事の大好きな彼女は、毎日祈るような気持ちで血圧測定をしているようです。その彼女六十八歳になり、退職後の生活をどのようにしていくのが、今後の課題となっています。

次に、当法人の通所授産施設「新生舎」を、四名が利用しています。男性二名は、主に外作業で畑の仕事をしています。また、女性二名は、主に室内作業で手芸品の制作に取り組んでいます。彼女達は、新生舎での作業のほか施設外授産作業として、合同厨房の食器洗浄業務も行っています。彼ら、彼女達からは、「今度はキャベツを作るよ」、「厨房で誉められた」と仕事への意欲と喜びを感じさせる嬉しい報告があったりします。たまに失敗談

もありますが…。なかでも一番楽しみにしているのは、月一回の工賃支給日とのこと。最後に、当法人の地域活動支援センターⅡ型（ヨカダイサービスセンター）を、十二名の方々が利用しています。散歩や運動などの他に、それぞれ興味を引き出す生きがい活動をしています。「今日はおやつを作った」「〇〇さんと〇〇さんがケンカした」等々、毎日山ほどのお土産話を持ち帰ってきて、全部聞いていると夕食の支度が間にあわないほどです。

このように、日中活動の場所を保障していくことが、充実した毎日を送るためになくはならないものです。高齢になり、健康面での不安を抱えていたり、精神面での配慮を必要とする方も多いため、職場訪問を行ったり、日中活動を支援されている方々とのできるだけ情報交換を行うことも、世話人の重要な業務のひとつとなっています。このような支援があつてこそ、「明日も笑顔で元気に出かけられること」につながっています。これからも、グレースホームの生活を継続できるよう、日々の関わりに支えられながら、生きがいのある楽しく有意義な生活が送れることを願っています。

「お母さん、お父さん、おばあさん、おじいさん」

副主任指導員 南雲いずみ

二〇一〇年を迎え、今年は「どんな年になりたいですか」と利用者の皆さんと話し合いを

しました。皆さんたちは「健康で、みんな仲良く、楽しく過ごしたい」と話をしていました。そこで、「新年会はどのようにしましょうか」とお聞きしたところ、「おいしい寿司を食べに行きたい」という意見が出ました。しかし、職員の心中は、この新型インフルエンザ等が流行っている寒い季節に、街に出かけていくのは無謀ではないかとの心配がありました。そこで、以前から気になっていた『出張・翔太寿司』にお願いをしたところ、快く出張してくださることになりました。

早速予約を入れると、翔太寿司さんは「せっかくなので、事前に利用者さんたちと知り合いたい」とのこと、お店の準備等で忙しい合間をぬって、三日間もボランティアに来て下り、利用者の皆さんと交流を図って下さいました。

当日は、翔太さんにお寿司の握り方を教えていただき、みんなと一緒にお寿司を握りました。大きい握り、小さい握り、丸いお寿司、細長いお寿司、おにぎりのようなお寿司と、個性あふれた芸術的なお寿司が沢山できました。自分たちで初めて握ったお寿司は格別においしかったです。イケメンの翔



太さんの優しいお人柄もプラスして皆で楽しい時間を過ごすことが出来ました。利用者の皆さんからも「翔太君!」「翔太君!」の呼び声と笑い声が響き渡り、とても充実した新年会になりました。

年末のヨカデイクリスマス会には、「江見勇一郎とその仲間達」によるギターコンサートを開催して一緒に歌って踊り、今年三月には人形劇団の団長「カッパのおじさん」をお招きして、手作りの可愛い人形を使つてのパネルシアターや紙芝居で演出していただき、二〇〇九年度の行事を楽しく締めくくることができました。

おかげさまで、地域のボランティアさんたちとのふれあいが徐々に広がってきて大変感謝しています。

二〇一〇年度も、利用者さんの健康に配慮し、安全・安心で楽しい日中活動の支援を心がけていきたいと思っています。

「地域づくりネットワーク」

中核地域生活支援センター 君津ふくしネット

障害児者コーディネーター 中尾 実慧

「地域づくりって何だろう?」「資源の創出・活用って?」漠然とし成す術も分からず、自身の中で消化しきれずにいました。先にある「居場所づくり」までには気がいかず、目の前の相談者の方の今いま、困っている事柄に対してのみにしか焦点を当てていなかったのかもしれない。振り返ってみるといつの間にか「出来る事」より「出来ない事」の方

に目を向けてしまいがちになっていた様な気がします。今、十分に「地域資源の活用が出来ているのか。」と問われれば未だ出来ない事も多くあります。及ばない状況の中で「地域づくり」について申し上げるのは

大変恐縮ではありますが、ここにきて特に「地域の社会資源」の重要性を実感しています。資源とは物理的なものだけではなく、人的な繋がり・触れ合いでもある事に改めて気づかされます。「人の繋がり」とは力であり、ひいては「それぞれの出来る事、持っている力」であると思います。その力を引き出す、持ち寄る場が出来る事は、社会全体にとっても大きな意味を持つのではないかと思います。

体調を崩され、ずっと自身の居場所を探し求め模索した結果、フリースペースを利用して皆さんがくつろげる場を提供される方がいらっしやいます。最初は何気なく休んでいかれたお客さんもいつしかその場所に行けば「〇〇さんに会える。」という事でその方目当てで利用される常連のお客さんも多くなっています。また場の提供だけに留まらず、「私達にも地域で出来る事はないか?」という事で、最近ではボランティアとして定期的に駅前の花壇清掃を行っています。花の植え込み



をしているところ、通りがかった方と話題が広がったり、また途中でスコップ、除草剤を持ってきてくださり、一緒に作業を手伝ってくださる方、差し入れとしてお茶を持ってきてくださる方等、活動を通して、コミュニティの輪がまた広がっていきます。

また活動が続けていく中、折角出来た場・コミュニティを「たとえ自分達が一線を退いた後でも絶えず継続していく為にはどうしたら良いか?他で実践している当事者グループがあれば見てみたい。」と話がありました。現在だけではなく先を見据える眼、行動力に圧倒される事もしばしばです。その貴重な原動力をどう活かし繋げていくか、また無いものがあればどう開拓していくかを考えていかなければなりません。「こうであつたら良いのに。」と望む事と現実のギャップとの狭間に共に考え悩んでしまう事もあります。しかし一緒に考え、試行錯誤する過程は決して無駄な事ではありません。時間を共有する・寄り添う事は互いに自らの力を高め、進んでいく力になるのではないかと思います。

着任してから二年目も終わりに近づく頃、私の中の課題としては発達障害者の方や引きこもりの方の居場所づくりが挙げられます。今まで出会った関係者の方々、相談者の方々から学んだ事を活かしながらこれからも更に精進してまいりたいと思っております。



児童養護施設 望みの門かずさの里

へ年を振り返って

保育士 川和田直臣

望みの門かずさの里に就職し、一年が過ぎようとしています。この一年様々な場面を経ながらより多くの経験をしたという実感があり、同時に多くの感情を抱きました。

初めの頃は、子どもたちとの関わりに戸惑い、日々こなすことで精一杯でした。慣れる中、自分なりの思いを持って子どもに接するも、理解されず聞く耳を持ってくれない姿に悩むこともありました。諸先輩職員の動きこなし方に目を向ける中、子どもたちへの話し方、関わり方にかなりの違いがあることに気づきました。

一方的な会話にすることなく、年齢や性格、その子が抱えている重い気持ちを踏まえながら、一人ひとりに応じた伝え方・表現に徹していました。同時に日常生活にある、ユーモアを交えながらのコミュニケーション、工夫した関わり方も目につきました。気づけば職員として持つべき技量であると、今更ながらに自問自答しました。

一方で、子どもたちの元気な姿も印象づけられました。真夏の暑さを吹き飛ばす海水浴でのエネルギー、低学年生のカブト虫クワガタ収集への熱中度にも関心しました。中でも千児協球技大会ソフトボールでは、練習また試合当日と選手・応援の子どもたちとの一体

感を味わい、日々の仕事への自信にもなりました。

子ども同士のぶつかり合い、無関心を装った態度など、寂しさ難しさを感じることも多いですが、こうした様々な行事の中で個々の優しい面、力強い面を発見することで勇気づけられたように感じます。

この一年の子どもたちの育ちに比べ、自身の成長はどうなのか不安もあります。二年目を迎える中、子どもたちと今築ける関係を大切にし、同時に諸先輩の技量を更に吸収し、信頼されるかずさの里の職員になりたいと思います。



乳児院 望みの門 方舟乳児院

『愛がなければ』

前園長 田尻 隆

いつもの朝、出勤してみると突然玄関からいかつい大男が出てきました。「だ、誰？」と言うより早く「あっそうか。今日は内装工事の日だった。」と思いだし、不審者扱いから一転「おはようございます。」と業者のお兄さん扱いへとスイッチを切り替えました。：ところがこのお兄さん無言のまま立ち去って行くではありませんか。「マッタク、これから近頃の若いもんは体ばかり大きくて、ろくに挨拶もできやしない。」いっちゃん睨みつけてやろうと思ひ振り返ると、なんとこのお兄さん満面の笑みを浮かべ頭上高く思い切り手を振っているではありませんか。「な、何？」と言うより早く、お兄さんの笑顔は窓ガラス越しに微笑む子どもたちに向けていることに気がつきました。朝から不愛想で仏頂面の若者を一瞬にしてさわやかな好青年に変えてしまう小さな子どもたちの愛おしさに改めて驚かされた出来事です。



ガラス越しの微笑み

ある調査によると子育て中の母親が今一番したいことのベスト3は「ゆっくり食事がしたい。ゆっくり眠りたい。ゆっくりトイレに入りたい。」であるそうです。このことはマズロー氏の言う欲求段階説の底辺を支える生理的欲求の欠如にあたり、子育て中の母親は人間として最も基本的な欲求すら満たされていないという現実を示しています。もちろんこの厳しい状況下の母親を動かしているのは子どもへの深い愛情のほかありません。

ところが最近、耳を疑うようなニュースが日本中を駆け巡りました。奈良の智樹くんは五歳なのに体重は六キロしかなく、四歳で亡くなった埼玉の力人くんは「お水をください」と哀願する声を近所の人が聞いていたそうです。わが子が日々衰弱していく姿を一体どんな思いで見ているのでしょうか。夫婦は「愛情がわかなかった」と供述しているといいますが。いつの間にか私たちの身のまわりから愛が消えてしまったのではないかと思わされます。

望みの門 方舟乳児院は、愛おしい存在である幼子が愛情に包まれ安心して生活できるよう二年目の歩みを進めることになりました。ここには子どもに必要なものは何でも揃っています。美味しい食事、快適な居場所、豊かな自然、何でもです。けれどもそこに愛がなければ全てはむなしなものとなるでしょう。愛への無関心は霊的・精神的な貧困をもたらすからです。

これまで非力な私を用いて下さった神さま、

子どもたち、職員、関係機関の皆さまに心より感謝申し上げます。佐野毅新園長のもと新たな歩みも祝されますようお祈りいたします。

編集後記

四月一日、春の風、大風が吹き荒れた、何か波乱に富む新年度になりそうな予感。

月にむらくも、花に風、常に最高の状態を維持するのは至難の業、まして世の中の自分の思いどおりになるはずも無い。大風の中休みを狙ったか、昨日は佐久間ダム、明日は富津公園と、利用者の皆さんとお花見に出かけています。

さて、去る三月西千葉教会において、新年度事業計画が審議の後承認された。その中には法人はじめての、有料老人ホーム建設計画がある。定員十一名のこじんまりしたもので、新生舎に面した道路沿いに姿を表すことになる。

又、今春は大卒三、短大卒一、高卒一、の新規採用が試され、理事長から辞令が交付された。同時に施設長、副施設長、在宅支援課長（心得）、主任、副主任、の昇任人事が行われた。特に、施設長と総合施設長の間に、地域福祉、施設福祉、児童福祉、の三部長を置き、組織の強化を図った。これらはすべて巻頭言の理事長による奉仕の業、利用者サービスの徹底化に通じるもの。

地域社会の福祉ニーズは待ったなし。法人の対応は迅速でなくてはならない。（Y・I）